

戦後六十五年を迎えて

秦野市支部 袖田 キク（妻）

戦没者 袖田 松次郎

戦没地 西部ニューギニア

戦争中は平和産業に勤めていたので、海軍軍属として徴用で藤沢飛行場建設の訓練を二、三ヶ月して十九年二月初めに南方方面に行きました。

内地に居る時、一度外泊で家に帰った時の事、包を開けてみると洗濯物には大きな虱、そして大根と人參の尻尾の小さいのが転がり出たので聞きました。畠を掘っていると出てくるのでお腹が空いて食べた残りを勿体ないので持ってきたと。面会に行った時、食糧事情の厳しいのは分かっていました。

東京大空襲で義兄一家は浅草で焼け、姉夫婦は南砂町で行方不明に、数日たって尋ねました。駅を出て吃驚、見渡す限り何一つ無く、人影もなく、すぐ引き帰しましたが私では何もしてあげる事も出来ず心残りです。

私達は南千住で電車の通っている土堤が近くにあり、そこへ登って避難したので命だけは助かりました。高い所から見渡す限り一面火の海、一夜を過ごしたのです。

怖いと言うか、恐ろしいと言うか生きた心地しませんでした。昼頃おにぎり一個配給がありました。その時、浅草の兄が尋ねてきましたが、お互いに身一つ、どうする事も出来ず男泣きして戻って行きました。

身の寄せ所もなく一日半掛かりで実家（大山）に辿り着きました。

疎開しても親も年をとっているので落ち着いて居られません。知り合いの旅館の手伝い等して働きました。

終戦になり、外地からボツボツ復員し始め、私も男兄弟四人南方、北支、満州、富士戦車学校、次々と無事に帰ってきましたが、なぜか喜んでやれず陰に隠れて泣けました。

今日か、明日かと帰って来るのを待っている時、「唯今、帰ったよ」と笑って外に立っている夢を見ました。あの笑顔の姿が今も脳裏に焼きついていきます。

二十一年十一月二十五日公報の知らせがありました。横須賀復員局へ遺骨を父と二人で引きとりに行きました。

此の時、お葬式も簡単に済ませました。

何時までも落ち着いて居られません。姑は長男の所に、子供と位牌は実家に預けて私は戦前主人の勤めていた社長宅にお世話になって会社に勤めました。

長年働いていた経験者の中で三十過ぎて覚える仕事、女性の多い職場、楽しい事、嫌なこともあります。途中何度か辞めたいと思うこともありましたが、他に行く所もなく、生活の事を考えるとそれも出来ません。

月日の経つのは早いもので彼方、此方のお世話になり乍ら、四十九年十月会社を二十七年間無事に勤めて定年退職致しました。

秦野に家族で居住し、近くに墓地を求め、五十一年八月三十三回忌に、預けておいた骨壺、位牌を墓地に収め法要を済ませ、やっと肩の荷が降りた思いです。

早速、お寺（東光寺）さんの世話人を頼まれ、これも仏の供養と長い間お手伝いさせてもらいました。

私達これまで無事暮らす事が出来ましたのも、遺族会が出来、遺族年金、特別給付金等支給されたのも各県遺族会の役員の皆様のお陰と感謝致します。

最後の余生を無事に過ごしたいと願っています。

帰らぬ英霊に心からご冥福をお祈り致します。